

協議会ニュース 121号

愛知県自然観察指導員連絡協議会 2008. 11



私の出逢った“白花”たち
イラスト：東三河支部 中西普佐子

研修報告

初秋の御池沿沢を尋ねて	石原則義……………P2
アサギマダラと秋の七草	瀧崎吉伸……………P3
フォローアップ研修	田實健一……………P4
カシノナガキクイムシの被害調査	堀田守……………P5
知多支部観察旅行	平松俊彦……………P6
会員のページ	
自然観察指導員と生物多様性条約	菅我部行子……………P7
フータン植物観察記	天野保幸……………P8
書籍紹介「海から来た植物」	中西正……………P9
海の生き物紹介	中井康夫……………P10
理事会記録	……………P11
行事案内・編集部	……………P12

初秋の御池沼沢を尋ねて

名古屋支部 石原 則義

●御池沼沢は、四日市市西坂部町（大池中学東隣）の標高約 35m の低地にあり、面積は、東部指定地約 29,800 m²、西部指定地約 25,700 m²です。沼沢西方の台地からの湧水が流れ込んで西部では止水状態となった沼沢を、東部では西から徐々に流れ込んでたまった沼地を形成したものと思われます。従って水温は西部が低く、東部は高くなっています。

この沼沢の植物群落は、昭和 15 年に安井直康氏（当時四日市高等女学校教諭）によって発見され、世に出たものです。その後の研究で、この沼沢には、寒冷地のヤチヤナギ、暖地性のミクリガヤ、東海地方固有のシラタマホシクサなど分布上注目すべき植物が混生、またヒメミミカキグサ、ミカワタヌキモなど食虫植物も豊富で植物学上貴重な沼沢であることが明らかとなり、昭和 27 年 10 月 11 日、国の天然記念物に指定されました。（「よっかいち緑の会」の資料より）

●御池沼沢の現状

御池沼沢は現在、東と西の指定地にわかれています。もともとは一つの大きな池でした。江戸時代の絵図には一つの池として描かれています。明治時代に入ると陸化（乾燥化）し始めた池の中央を農地にするための開拓が行われ、沼沢は東西に分離されました。戦後、その農地は国の土地改良事業として圃場整備されました。また、昭和 40 年代には御池の北側には東名阪自動車道が走り、大きな建物が建てられました。

このような環境の変化は、まず中央の湿地を農地にするために大量の水を排出し、さらに北側に道路など大きな建築物



▲ナガボノアカワレモコウ（バラ科）

ができたために水脈を圧迫することになり、東西に分かれた御池沼沢の水資源の減少となってあらわれてきました。

そのため、現在ではポンプで地下水を供給していますが、陸化はさけられず、次第に水位が下がってきています。そのため、沼沢（ぬま）としての環境が悪化しつつあり、その環境の維持が懸念されています。（「よっかいち緑の会」の資料より）

■ 8 月 31 日（日）本郷駅バスターミナルにて 8:30 集合。4 台に 15 人が分乗し、途中、東名阪の御在所 S A で 1 台 2 人が合流して、御池沼沢を目指しました。

御池沼沢では、「よっかいち緑の会」の代表である石川勝彦氏に案内していただきました。午前中は、暖地性のミクリガヤ（カヤツリグサ科）がある東部湿地を回りました。お昼は近くのうどん屋さんで休憩しました。午後からは、ヤチヤナギ（ヤマモモ科）がある西部湿地を回りました。

西部湿地には、ミズギボウシとサワギキョウがたくさん咲いていました。ヘビノボラズは実をつけています。ムラサキミミカキグサはかろうじて健在です。

アサギマダラと秋の七草

東三河支部 瀧崎吉伸

日 時 H20/10/5 (日) 9:30~12:00

場 所 大原調整池 (新城市)

やや心配される天気の中、開催された観察会には珍しく子どもが一人もいない。指導員を含め大人ばかりの50人。観察会はず、駐車場脇の芝生の広場から始まった。この広場は調整池の堰堤の上に作られていて、大人50人でぐるっと取り囲める程度の広さ。指導員の富安さんのアイディアで、そうっと広場を取り囲む参加者。広場の中心に向かって一斉にじわじわと輪を縮めていく。そうすると出てくる出てくる、バッタやコオロギの仲間がものすごくたくさん、びよんびよんと広場の真ん中へと追い立てられていく。エンマコオロギ、ツツレサセコオロギ、ヤブキリ、ショウリウバッタ、マダラスズなどなど。コオロギの顔を正面から見るととてもおもしろい。

この広場には3等三角点があり、指導員の間瀬さん、林さんからその意味について解説がある。石巻山の高さが2m高くなった (356m→358m) 理由も教えてもらえた。山上憶良が詠んだ秋の七草の歌を紹介し、半日の間に会える花から、憶良に成り代わって自分なりの現代版秋の七草を選定しよう と声を掛けて散策路に出発。

散策路に入りしばらく行くと、固い地面がかき回されたように耕されている。参加者に誰がこんなことをしたのでしょうかと質問を出す。イノシシのラッセル痕について、ほ乳類に詳しい指導員の神戸さんが解説をする。ちょうど栗の木の下にあったために、イノシシが噛み砕いた栗の殻もいくつか落ちていて参加者の興味をそそった。神戸さんがこの近くで撮影した赤外線シャッターのカメラによるほ乳類の写真を紹介して下さる。最近イノシシがものすごく増えているのは、キツネの減少と関係があるのだろうと教えていただいた。イノシシの幼獣 (ウリボウ) を取って食べる天敵が減ってしまっているのが原因と推定されるそう。イノシシなどの偶蹄類がどのように蹄を使って急な斜面を登るのかについても、足跡などを見ながら説明がある。4本足の上にながちりと地面を蹄で掴むのだから、我々よりは安定がよいのは納得がいく。

道の脇にはサワヒヨドリ、ヒヨドリバナ、エンシュハグマ、サジガンクビソウ、オトコエシなどの花が咲いている。やがて林道に出て林道沿いを歩く。林道沿

いにはメドハギやツクシハギなどのハギの仲間が目につく。所々にヒヨドリバナの群落がある。お目当てのアサギマダラが吸蜜に来てくれると良いなあと期待しながら歩く。あまり天候が良く無いためか、アサギマダラの姿が見えない。心配しながら歩いていくと、次の大きな群落の辺りで、指導員の星野さんが走り出す。どうやらアサギマダラが視野に入ったようだ。特製の白い布をぐるぐる回しながら近寄っていく。するとアサギマダラが寄って来るではないか。魔法のような技に参加者一同「すごい」と声上がる。気温の上昇につれてアサギマダラの数も増え、我々の居る林道脇のヒヨドリバナ群落にも何頭かが吸蜜にやってくる。鮮やかなネットさばきで次々と蝶を捕獲する星野さんと原田さん。昆虫に関しては大ベテランの指導員である鈴木友之さんが、雄雌の区別の仕方や、アサギマダラの生態、マーキングによる渡りの調べ方や現在までに分かかってきた情報などを丁寧に解説してくださる。およそ10頭ばかりを捕獲し、計測とマーキングをして放す。なかには死んだふりをして参加者を驚かせる個体も居て、大変に盛り上がる観察となった。

林道からは大原調整池 (別名、五葉湖) が一望できるところがあり、地名の由来や地形の成り方などについて間瀬さんから解説がある。名前の由来となった五葉城址までは、かなり登らないと行けない。途中道が不明瞭になっているようだ。

林道には多くの帰化植物の侵入も確認された。4年前にも同じ場所で観察会を行っているが、その当時は見られなかったタチスズメノヒエが林道の真ん中に群落を作っている。この林道には在来のスズメノヒエも残っており、もっとも普通に見られるようになった帰化種のシマスズメノヒエと併せて、3種類のスズメノヒエ類が観察できた。タチスズメノヒエは基部に硬い剛毛が生え、うかつに除草しようとする手に刺さって大変痛い。校庭などに侵入すると子どもに被害を与えることが心配される強害雑草だ。参加者の皆さんに覚えてもらって、注意を促した。

4年前の観察会ではまだ植えたばかりだったヒノキが茂ってきて、当時を見ることのできた珍しい形をした凝灰岩の「蛤岩」が見えなくなっていた。

指導員の参加も多く、様々なジャンルの素材を取り上げて行われた充実した観察会だった。

自然観察会でのリスクマネジメント

奥三河支部 田實 健一

9月13日(土)～9月14日(日)、「自然観察会でのリスクマネジメント研修会」が犬山国際ユースホステル(犬山市)で開催されました。愛知県内外あわせて23名の指導員が参加しました。高知県からの参加者も！

自然観察会をはじめとするフィールド活動には様々な危険要素があり、フィールド活動を行う自然観察指導員には、これらの危険要素をいち早く認識し望ましい対応について準備をしておくリスクマネジメントが必要不可欠です。この研修会は、自然観察会の開催前から開催当日、そして開催後まで想定される様々なリスクマネジメントの習得を目的としています。

初日は、まず島根県自然観察指導員協議会会長/NACS-J 元参与の佐藤仁志氏の講演をお聞きしました。実際に起きた事故を事例に、危険予知、危険要因の選別と排除、危険回避、事後防止策の大切さを学び、「野外における危険な生物と対応法」では、スズメバチ、マムシ、ヤマカガシ、クマなどに出会ってしまった時の対応法や応急処置法を学びました。「応急・救護の基本」では、犬山市消防署の職員の方から、三角巾やAEDの使い方を学びました。



二日目は、実際に野外に出でのシュミレーショントレーニングです。佐藤講師に問題を出していただき、チームに分かれてどのように対処するかを話し合い、実際にその対処法を実践し、実践することで前日に学んだ三角巾の使い方、ケガ人の運び方などを身に付けることができました。コウゾの皮でロープを作るのも良い経験になりました。特に楽しかったのは、木やハンカチ、雨合羽などの所持品の中から選別して担架を作り、実際に運んでみる事でした。階段を登り下りし、楽しみながら技術を習得できました。いざと言う時のためにメタボの人はダイエットをしておいたほうがいいかも(笑)

そして何より楽しかったのは、やはり夜の懇親会！酒が飲める人も、飲めない人も、最高の情報交換の場となりました。一部の人達は三次会まで続いたそうです。



この研修会で、普段ほとんど会うことのない他支部の仲間に出会えたことがなによりでした。また、今後いろいろな研修会に20代～30代の若い参加者が増える事を期待します。

カシナガキクイムシの被害調査

名古屋支部 堀田 守

9月号のp6-7で報告した調査で被害が確認された場所の一覧です。

2007.11.06現在

No.	名称	地点名		調査確認報告者
1	明治村南西部	犬山市		個人
2	小牧山	小牧市		小牧市
3	桃花台中央公園	小牧市		桃花台センター
4	海上の森	瀬戸市		海上の森センター
5	猿投山	豊田市		個人
6	豊田自然観察の森	豊田市		豊田自然観察の森
7	畏森公園	豊田市		豊田市
8	森林公園	尾張旭市		名古屋自然観察会PJ
9	小幡緑地	名古屋市	守山区	名古屋自然観察会PJ
10	猪高緑地	名古屋市	名東区	名古屋自然観察会PJ
11	明德緑地	名古屋市	名東区	名古屋自然観察会PJ
12	瑞穂公園	名古屋市	瑞穂区	山下通側 名古屋自然観察会PJ
13	牧野ヶ池緑地	名古屋市	名東区	302号沿い 名古屋自然観察会PJ
14	東山植物園内	名古屋市	千種区	名古屋自然観察会PJ
15	城山八幡宮	名古屋市	千種区	名古屋自然観察会PJ
16	名古屋城内	名古屋市	中区	名古屋自然観察会PJ
17	相生山緑地	名古屋市	天白区	名古屋自然観察会PJ
18	荒池緑地	名古屋市	天白区	名古屋自然観察会PJ
19	天白公園	名古屋市	天白区	名古屋自然観察会PJ
20	島田湿地	名古屋市	天白区	名古屋自然観察会PJ
21	滝の水緑地	名古屋市	緑区	名古屋自然観察会PJ
22	大高緑地	名古屋市	緑区	名古屋自然観察会PJ
23	船津神社(名和小西)	東海市	名和町	船津 知多自然観察会
24	名和中南東の森	東海市	名和町	善棚 知多自然観察会
25	渡内保育園南の森	東海市	荒尾町	油田 知多自然観察会
26	聚楽園公園北の森	東海市	名和町	砂崎 知多自然観察会
27	神明社の森	東海市	荒尾町	山王 知多自然観察会
28	明倫保育園西の七社之社	東海市	富木島町	貴船 知多自然観察会
29	西部中西の高根の森	知多郡	東浦町	緒川上高根 知多自然観察会
30	大池公園	東海市	中央町	知多自然観察会
31	竜美ヶ丘公園	岡崎市		岡崎市
32	甲山公園	岡崎市		岡崎市
33	自然観察の森	岡崎市		岡崎市
34	平和公園内	名古屋市	千種区	名古屋自然観察会PJ
35	茶屋が坂公園	名古屋市	千種区	名古屋自然観察会PJ
36	明が丘公園	名古屋市	名東区	名古屋自然観察会PJ
37	秋葉神社	名古屋市	天白区	名古屋自然観察会PJ
38	鶴舞公園内	名古屋市	昭和区	名古屋自然観察会PJ
39	八幡山古墳	名古屋市	昭和区	名古屋自然観察会PJ
40	八事興正寺	名古屋市	昭和区	名古屋自然観察会PJ
41	名古屋大学構内	名古屋市	千種区	水圏周辺 名古屋自然観察会PJ
42	春日井少年自然の家	春日井市	廻間町	名古屋自然観察会PJ
43	長久手たいようの杜緑地内	長久手町	根嶽	名古屋自然観察会PJ

注：名古屋自然観察会PJは、名古屋自然観察会カシナガ調査プロジェクトのことです。

知多支部観察旅行(猿投の森)

知多支部 平松俊彦

8月9日～10日

10時40分、東海市の新日鉄公園駐車場へ集合。南川指導員、浅井親子、榊原（靖）指導員と精鋭5名が車2台に分乗した。大府インターから伊勢湾岸道路、そして東海環状道路を通過して瀬戸赤津インターで下り、猿投の森野営地へ向かった。途中で榊原（正）指導員と落ち合い、昼過ぎに目的地に到着、「猿投の森づくりの会」の中村氏の歓迎を受けた。

昼食後、早速野営地すぐ前の小川で生き物観察を行い、たくさんの魚や虫を見つけ中村氏を驚かせた。終了後中村氏の案内で川の上流にあるイモリの生息地に出かけた。途中ダムで魚やカエルなどを観察したが、捕らえた魚の中で体の模様が正規の色と微妙に違い、同定でもめたものもあった。イモリの生息地では残念ながらイモリを見つけることはできなかった。しかし、1センチにも満たないヒキガエルと思われるたくさんのチビガエルが、林の中をあちこち跳び回っていて興味深かった。

野営地に戻り、テントを張り夕食の支度を始めたとき、前の小川で一大イベントが始まった。正体不明の虫が次々にすごいスピードで川面を飛び回り、時々ダイビングを繰り返しているのだ。みんなが捕獲を試みたが速すぎてとてもつかまえない。「トンボじゃないか。」「もっと小さいよ、アブだろう。」「ハチかもしれない。」「いや、ガだと思ふよ。」わいわいがやがや推測したがわからない。結局この日は日没によりわからずじまいに終わった。虫の正体が判明したのは翌朝、陽が昇ってからだった。「捕まえた」。浅井氏が大声を上げた。急いで行ってみると謎の虫の一匹が網の中でばたばたしている。調べた結果ホシホウジャクというガの仲間であることがわかった。謎の虫の、前日同様の行動は早朝から始まった。しかし前日とは何かが違う。動作が鈍いのだ。しかも日が昇るにつれてさらにのろくなっていった。肉眼でも見分けられるほどのスピードになり、私ですら捕えることができた。なぜこのような行動をするのか調べたがわからなかった。水中ダイビングは体を冷やすためだろうか。

さて、イベント完了後夕食を摂って、灯火観察のため装置をセットした。降幡支部長も合流して、中村氏の案内で野営地の周辺一周のナイトハイクに出かけた。しかしキマワリが見られた程度でこれといった成果は得られず、灯火観察に期待した。灯火にはスズメガなど多種のガ類のほか、コガネムシ類、ヒグラシ、ミミズクなどのカメムシ類、ハエ類などたくさんの虫が集まった。尾張支部の高橋指導員も途中参加されたが、ミミズクは久しぶりに見たそうである。知多半島の観察会ではなじみのないカワゲラ類やササキリモドキ類も見ることができた。灯火観察を始めてまもなく雷がなって雨が降り始め、やむなく午後9時前に観察を中止した。その後ほとんど降らなかったもので中止したことを後悔した。灯火観察後は雑談にふけたが、真夜中に近くの土手で光の点滅を見つけ、急遽深夜のホタル鑑賞会が始まった。

光っていたのはクロマダボタルの幼虫で、周辺の土手にかなりの数の発光が見られ、淡い光の競演を楽しんだ。小川の生き物調査からホタル鑑賞会まで充実した1日であった。10日はメンバーの大半が都合がつかず帰ってしまい、観察はほとんどせずに帰路に着いた。

自然観察指導員と生物多様性条約 (その1)

尾張支隊 曾我部 行子

国際会議ショック

2010年に生物多様性条約第10回締約国会議が愛知県名古屋市に決定しました。初めてこの名称を耳にしたときには、生物多様性 → 生きもののにぎわい → 条約 → 国際会議という、知っている言葉を並べただけの理解でしかありませんでした。

そこでまず、最初の困惑は、「国際会議の経験がない名古屋で、果たしてNGOに何ができるのか。」と国際協力系の人から問いかけられたときでした。

国際会議ってどんなもの？ そこにNGO(市民)が関わるってどういうこと？ 生きものの多様性についてだけ思いを致しては全体がみえないのではないのか、という疑問の第1歩でした。

生物多様性条約

第9回締約国会議ショック

まずとにかく知りたいという市民で名古屋に(財)日本自然保護協会国際担当の道家哲平さんをお招きしての学習会が2度開催されました。昨年(2009)の10月7日(伊勢三河湾ネットワーク・ESD・G8NGOフォーラム共催)と12月1日(なごや環境大学地域国際活動研究センター主催講座)です。

生物多様性条約の第一条の目的に書かれているのは、生物多様性の保全、その構成要素の持続可能な利用、及び遺伝子資源の利用から生ずる利益の公正かつ衡平な配分ですが、道家さんのお話の中で心に残ったフレーズがあります。「生物多様性条約(CBD)とは明日もこども達と地球で生きていこうという約束です。」

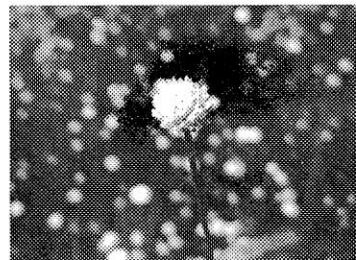
というものです。何とストンと心に落ちるやさしくも深い言葉かと、関わっていききたいという気持ちになりました。

12月1日2回目の講座の後に、このまま別れたら残念という有志の発案がありました。今年3月14日には、道家さんの他に環境省からも来ていただき、生物多様性フォーラムを実行委員会形式で開催しました。その実行委員会がその後、生物多様性フォーラムというグループになったのですが、会の趣意書を作成するときにも、みんなで侃侃諤々、手探りで悩みました。ホストNGOという言葉がのしかかってきました。

そして、迎えたのがドイツボンでの生物多様性条約第9回締約国会議でした。勇気あるというべきか、乗りがいいというべきか、何と10人もの人が日程をずらしながらボンへと乗り込んだのです。(ただ今そのときのボン報告書を作成中)

では、実際にボンからもたらされたショックとは何だったのか、それは、この条約の裏の目的とは、南北問題の解決にあるということだったのです。

(次号に続く)



シラタマホシクサ

ブータン植物観察記

東三河支部 天野 保幸

2008年8月19日から28日までヒマラヤ山脈南東麓のブータン(Druk Yul=ブータンの正式国名)を訪れることができた。ブータンは、多くの国が目指すGNP(Gross National Product)ではなくGNH(Gross National Happiness)を求めることを、先代ワンチュク国王が宣言したことで知られている。ブータンはGNHという概念のもと、1)経済成長と開発、2)文化遺産の保護と伝統文化の継承・振興、3)豊かな自然環境の保全と持続可能な利用、4)よき統治——の4つを柱として開発を進めてきた。その結果、今も豊かな自然が多く残っている。例えば、電源開発にダムを造るのではなく、地形を生かした水路式発電を導入して電力をまかなっていることはその一つであろう。

ブータンの植物

ブータンの植物相は日本とよく似ている。同じ東アジア植物区系に属しているのであるから当然である。しかも地形もよく似ている。ヒマラヤ山脈の南側にあり、規模こそ違いが国土のほとんどが山地である。(高度800mから約7500m)平地はほとんどなく、川の流域に若干の平地が存在する。そして東西に長い国土の北端をグレートヒマラヤが東西に走り、そこからブラックマウンテンが南北に枝のように延びる。谷(町)から谷(町)へは高度3000m以上の峠を越えないと辿り着けない。標高差1000mから2000mの峠越えでは、当然植物の垂直分布が観察できる。私たちが通過したティンブーからドチュラ峠(2000m~3200m)までを見ると、始めはブータンマツを中心とした林が続き、2600mあたりからトウヒの仲間の林に変わる。さらに峠付近ではツガの仲間の林に変化した。ところが、ドチュラ峠を越え、プナカ(1600m)を目指す、始めはツガの仲間からトウヒの仲間に変化した、2400mあたりから常緑のブナ科が現れ、照葉樹林への劇的な変化を示した。こ



ツリフネソウの仲間(7種類のうちの1種)

こ、ブータンが照葉樹林文化圏の西の端にあることを感じさせられた。その後はブータンマツも交えた針広混交林が続いた。プナカまでの行程では道端にデイゴの花やノボタンの花を見ることができた。またきれいに耕作された多くの棚田を見ることができた。今回の旅行では照葉樹林帯から高山帯の植物まで幅広く観察を行った。中でも、1300m付近から3300mのペレラ峠への往復は亜熱帯から亜寒帯までの垂直分布が観察でき大変興味深いものであった。途中には白花のシュウメイギクが咲いていたり、小型の地生ランやツリフネソウ類などが観察されたりした。峠ではミミカキグサを観察できた。ミミカキグサは湿地ではなく湿った岩場のコケの群落内に生育し、葉は扇型であった。特別な場所でなくともそこは野生植物の宝庫、日本ではほとんど見られなくなってしまったイシモチソウも花と根生葉をつけた状態で観察できた。2000年に訪れた中国雲南省の北西部と今回のブータン西部、そして大きく離れた日本の植物を比較する時その類似点に感心しながらも、同じ仲間であっても日本とは比較にならないくらい多様な種分化を観察できたことに満足した旅行であった。ブータンでは昔の日本と同じように自然は今も生活の中の一部となっている事を強く印象付けられた今回の旅行であった。

書籍紹介

『海から来た植物－黒潮が運んだ花たち』

中西弘樹著 八坂書房 2,600 円



西三河・東三河支部 中西 正

上記の本を、愛知県（知多）出身で長崎大学教授の中西弘樹先生が出版されました。紹介させていただきます。

先生は以前に『海流の贈り物』、『種子は広がる』、『漂着学入門』を出版されています。植物生態学、中でも種子散布を中心に研究されている中で、海流に注目して本にまとめられることが多いようです。今回も海、特に海流に注目されたものです。

全体は三部構成で、その第一部は「海流散布と日本の植物」で、海流のこと、海流散布植物のことが述べられています。この部では、ツルナ、イワタイゲキ、グンバイヒルガオなど黒潮が運んだ南方起源の植物 10 種類の解説があります。

特にハマユウとハマボウに関しては、それぞれに 1 章を割いています。ハマユウでは、分類、花の形態、分布群落の生態などが解説されています。また、ハマボウでは、分布、生育形と葉・花の形態、受粉と訪花昆虫、繁殖生態などが広く述べられています。

第二部はそのハマユウとハマボウの、古典から現代までの扱われ方を対比し、解説しています。柿本人麻呂に歌われたハマユウ、それが江戸時代にはどうして忘れられたのでしょうか？ しかし花のきれいなハマユウは、現代では地域のシンボルとして復活しています。これに対して、古典の世界では扱われなかったハマボウが近代には脚光を浴びています。これらの点を解説しています。内容は、分布や生態、分類といった一先生の研究イメージだけでなく、名前の語源、民族あるいは古典文学といった大変広い分野によって構成されています。この部分は、先生の幅広い関心と知識によってできあがったものと考えられます。

第三部は生育地の絶滅と保全についてで、現代を扱っています。東海地方はハマユウ、ハマボウの北限地域であり、本書にもその生育地が出てきます。ハマユウ、ハマボウの盛衰を見る中で、これらの群落の保全の必要性を述べられています。読み進む中で、ハマユウ、ハマボウに限定した保全ではなく、より広く、群落の保全や植生復元をする際には、どのような考えのもとでやればよいかを考えさせてくれます。

なお、本書には巻末に植物名の索引がついています。



ハマボウ（田原市）

知多の海岸生物6 アラムシロガイ

知多支部

中井康夫

干潟に行くと、どこにでもいるアラムシロガイは、「海の掃除屋さん」である。潮が引くとどこからか現れて、死んだ生き物や弱った生き物を食べて海の掃除をしてくれる。

砂や泥の上を這っている地味な小さな巻貝で冬の寒さで死ぬためか、かたまって打ち上げられているのをよく見る。かたまって打ち上げられる貝のなかではホトトギスガイに次いで多い。ホトトギスガイは足糸で互にくっつき合って生活しているので、死んだ後ある程度の集団として打ち上げられることは考えられるが、アラムシロガイの場合は、どうしてそうなるのか疑問である。

小さな洗い流されたその貝殻は黄色っぽくてかわいい感じがするが、生きていたときは砂や泥にまみれ、人間にはほとんど見向きもされない。だから、関心を持たない貝が何をしようが、何を食べようが普通は問題にされない。しかし、私は干潟に大量にいるこの貝の働きに興味があったものだから、いつも気にかけて見ていた。

すると、貝やカニや魚の死骸はもとより、ほとんど水分からなっていそうなクラゲや、タマシキゴカイの卵塊（観察者にクラゲと勘違いされることが多い。触ってみれば、明らかだが、鶏卵のような手触りなのである。しかし、なかなか触れない人もあるようである。）まで食べるではないか。もっとおいしそうなのを食べればよいのに、死骸などをむさぼるように食べている。こんなことを見てから、アラムシロガイの食べるものに興味をもってしまったのだ。

このあいだは、とうとう、あの超おいしくないアメフラシに群がって食べているアラムシロガイに出くわした。1匹や2匹ではなくたくさんのアラムシロガイがたかっているのを確認した。生きたアメフラシを食べる生き物はほとんどいないのに、死ねばアラムシロガイのえさになるのである。アメフラシは死ぬと、味が変化するものなのかなと思ったほどである。というのは、アメフラシはかなりまずいと聞いていたからだ。アメフラシなどのように、大量に岸に打ち上げられて死んでしまうものがいれば、どこかでそれを片付けてくれる者がいなければならないと思ってはみても、日頃の観察において、新しい生き物の種類を発見する以上に生き物同士の関係を見出すことは難しい。

アラムシロガイがおおよそ動物食だとすると、残りの植物はヒメハマトビムシが食べているのだろうか。



(写真) アメフラシを食べるアラムシロガイ

平成 20 年度第 4 回理事会

日時：10 月 19 日（日） 14:00～16:00

場所：東三河ふるさと公園

参加者：松尾、降幡、浅井、石田、大谷、齋竹、
高橋、永田、布目、吉川、吉田、梶野、
樋口、三田

議事

1 来年度事業

○行事日程は早く決めることが必要であり、研修会と観察会については、今年度と同様で、支部総会までに計画を立てていただく。

○来年度は愛知県内で指導員講習会を開催する予定の年であるが、愛知県と NACS-J の共催でいつまで実施できるかはわからない。いずれ愛知県が主催者からおられることも考えられる。

○講習会を秋に開催し、そこで入新入会員から会費を 1 年分取ることが妥当か。半年分集めるなど対応を考えることが必要ではないか。

○講習会の開催時期をもっと早くできないか。

○県の事業として開かれると、予算年度が 4 月から始まるため、準備の都合で春は難しく、気候的に夏を避けて、従来は秋に開催してきた。県や NACS-J に時期を変更することが可能かどうか打診してみる。

○新入会員の歓迎行事を実施するかどうか。内容としては、午前中ワークショップを行い、午後歓迎会というようなものでどうか。

○新入会員の歓迎会という位置付けより、会員相互の懇親会でどうか。

○こうした行事は支部で来年度事業を入れる前に決めておくことが必要なので、平成 21 年 11 月 29 日（日）を協議会の日として設定する。

○来年度から会費を 2 千円に減額しても機関誌作成費、調査費、事務費（理事会開催回数の減少）などの見直しにより、本年度並みの事業実施は可能である。

2 理事会の回数

今年度は 6 回開催することになっているが、来年度からは 2 月（総会前）と 10 月後半の 2 回の開催とし、必要なら臨時の理事会を開く。なお、事業の執行については、担当のメンバーが必要に応じて運営会議を持って対応していく。

3 観察会の保険

現在、保険料は 50 円で、保険金は死亡・後遺

症 871 万円、入院 1 日 6 千円、通院 1 日 4 千円となっているが、保険料を 40 円にした場合の保険金は死亡・後遺症 600 万円、入院 1 日 5 千円、通院 1 日 4 千円となる。

今年度までは、支部から収める 40 円に加え協議会で 10 円分を負担して 50 円の保険料を支払っているが、この協議会負担の 10 円を廃止する。また、これまで協議会が 50 円の保険料を負担してきた「あいちの自然観察会」など協議会主催の行事についても、支部行事と同様に参加者に保険料を負担してもらう。

4 協議会ニュースの発行

前回の理事会で印刷費の軽減により 6 回発行で 16 万円の節減になるという試算があったが、発行回数を年 6 回（隔月）から年 4 回（季刊）にすれば、さらに印刷費・通信費で 10 万円程の節減が可能となる。

しかし、季刊にすると、行事案内などが間に合わないことも多くなるので、Web ページ掲載など別の措置を考える必要がある。各支部の会報は、尾張は毎月、名古屋は年 6 回、西三河は年 4 回、知多は年 1 回の報告集というように、発行頻度が異なり、支部を頼るわけにもいかず、場合によっては臨時に発行することも考える。

5 来年度の会費

現行の年間 3 千円を 2 千円とするよう提案する。これによる 35 万円程の収入減は、協議会ニュースの発行回数を減らすほか、調査費や事務費の削減で対応する。研修会では、参加費の徴収も考える。

6 30 周年記念事業

平成 22 年が協議会発足 30 周年に当たるので、何らかの記念事業を実施する方向で、今回の理事会までに考えてくることとする。

7 副会長

規約では副会長は 2 名となっているが、現在 1 名が空席状態のため、早期に選任したい。

8 その他

○10 月現在で会費の納入率は 9 割近い。

○経費を立て替えている理事は、会計まで早急に連絡すること。

○次回理事会は、11 月 30 日の午後 2 時から奥三河（新城市の桜洲公園付近）で開催する。

（報告：齋竹）



行事予定



■第2回人と自然の共生国際フォーラム

テーマ：「自然の叡智を再考する」～森林から考える人と自然の共生～

当協議会も後援している事業ですが、10月末で参加者募集が終了しているため、定員に余裕があれば当日参加受付がされる11月15日のプログラムを紹介します。

日時 11月15日(土) 10:00～19:30

場所 愛知県立大学講堂(愛知県長久手町大字熊張字茨ヶ廻間 1522-3)

定員 500名

主催 人と自然の共生国際フォーラム実行委員

プログラム

①基調講演 「身近な森の魅力と魔力」(講師：ケビン・ショート)

②ポスターセッション(様々な団体の活動紹介)

③パネルディスカッション 「森林から考える人と自然の共生」

コーディネータ：川井秀一

パネリスト：天野正博、川勝平太、蔵治光一郎、小澤紀美子

編集後記

11月号の編集を終え、振り返ってみると気になる点が若干あります。▼まずは、行事案内に募集期限後の案内を出したこと。協議会の後援なので、そのことだけでも紹介すべきかと、無理やり掲載しましたが、当日、定員オーバーで入れなかったら申し訳ありません。とはいえ、隔月発行では、掲載のタイミングがあわない行事が出ることもやむをえないでしょう。▼理事会で議論されている季刊になると、さらにこういう事例が増えるでしょうから、情報の発信の仕方を変えるが必要になりますね。▼また、原稿提出を急がせてしまったことも反省点です。締切間際の行事の報告は、執筆者には酷でしょうが、今回掲載を失すると、出るのは2ヶ月先となり、ずいぶんと間延びした記事になってしまいます。忙しいところ、すぐに書くことは難しいかもしれませんが、執筆者、編集部ともそれぞれに頑張ってみるしかないですね。(齋竹)

☆編集部より

協議会ニュースは会員みなさんに協議会・支部の行事、会員の状況などをお知らせする媒体です。会員みなさんからの積極的な投稿を期待しています。

編集スタッフ

岡田 雅子 近藤 記巳子
齋竹 善行 酒井 勇治
永田 孝 山口 健

発送スタッフ

岩沙 雅代 横井 邦子

協議会ニュース編集部

〒482-0007
岩倉市大山寺元町 12-3
齋竹 善行
Eメール：BZA03620.nifty.ne.jp

■愛知県自然観察指導員連絡協議会 事務局(当面)

〒486-0904 春日井市宮町3-6-2

松尾 初

Tel 0568-32-5069

■Web Page：<http://naichi.net/>

■郵便振替口座：00820-9-6546(名義：愛知県自然観察指導員連絡協議会)